

黙示録10章「開かれた巻き物」

1A 力強い御使いによる宣言 1-7

1B 主の来臨 1-4

2B 神の奥義の実現 5-7

2A 甘く、苦いことば 8-11

本文

2024 年最後の礼拝、ここの箇所黙示録 10 章は、時期にかなっていると思います。今、主ご自身が、ご自分の計画を公に、明らかにしようとしている、危機的な時、あるいは逆に、期待すべき時だと思うからです。今年起こったことは、その前に起こっていたこと以上に、さらに聖書に、起こると語られていたことが起こっていたと思います。

ここ 10 章では、子羊なるイエスが、七つの封印を全て解かれた幻になっています。巻物が開かれて、それで、そこに書かれてある事柄が、一気に展開していく様を描いています。

私たちは、前の学びで、第七の封印が解かれて、そこから七人の御使いがラッパを吹き鳴らす幻を見ました。第一から第四の御使いは、天地に対する災いです。残る三つは、三つの災いと呼ばれました。第五と第六は、地獄からの悪霊の群れ、また軍隊でした。第七の御使いがラッパを吹き鳴らす前に、主が、この開かれた巻物の幻をヨハネに見せておられます。(第七のラッパは、11 章 14 節以降に吹き鳴らされます。)

1A 力強い御使いによる宣言 1-7

1B 主の来臨 1-4

¹また私は、もう一人の強い御使いが、雲に包まれて天から下って来るのを見た。その頭上には虹があり、その顔は太陽のよう、その足は火の柱のようで、^{2a}手には開かれた小さな巻物を持っていた。

使徒ヨハネがまた新たな幻を見えています。それは、「もう一人の強い御使い」です。黙示録の中で、既に「強い御使い」が出てきていました。5 章 2 節です、「また私は、一人の強い御使いが「巻物を開き、封印を解くのにふさわしい者はだれか」と大声で告げているのを見た。」この強い御使いが宣言したのは、巻き物を誰がその封印を解くことができるのか、その資格があるのは誰かと問いかけていることです。そして、屠られたと見える子羊は、死んだけれども、よみがえられたイエスが、世を贖う資格を持っておられることを見ました。

そしてこの強い御使いは、「開かれた小さな巻物」を持っているのです。つまり、七つの封印が全て解かれたその巻物を手にしています。主が、これで世を贖うための計画がすべて開かれていることを示しているのです。

この御使いの姿が、主イエスご自身の栄光のそれそのものです。主ご自身ではないことは明らかで、6 節に、天におられる神に誓っているのですが、それはこの御使いが神以下であることを示しています。主イエスご自身は、このような姿では出てきません。けれども、主イエスの再臨時の栄光をそのまま表しています。

まず、「雲に包まれて」とあります。そして、「天から下って来」ています。ダニエル書 7 章で、人の子が天の雲に乗って父なる神の御座のところに近づかれた幻があります。それを、イエスは、大祭司カヤパの前で証言されました(マタイ 26:64)。主が再臨される時に、雲に包まれて、天から降りてこられます。そして、「その頭上には虹があり」とあります。主が、ノアに対して水の裁きの後に、契約を結ばれて地を呪うことはすまいとして虹をお見せになりました。虹は、神が裁かれるけれども、その後に安息と平安を与えるという希望を示しています。この虹が、預言者エゼキエルが見た、御座の幻のところにありました。(エゼ 1:28)。そして、黙示録 4 章で、神の御座のところにありました(3 節)。それから、「その顔は太陽のよう」とあります。1 章で、イエスの「顔は強く照り輝く太陽のようであった」と言っています(1:16)。そして、「その足は火の柱のようで」とありますが、イスラエルの荒野の旅の火の柱を思い出します。そして、1 章での主イエスの栄光の姿では、炉の真鍮のようであると描かれていました(16 節)。

それから、開かれた巻物は、「小さい巻物」とあります。それだけこの御使いが、巻物に対して大きいからだと思われれます。子羊のような方が、今は獅子のように大きな方として現れておられます。

² 御使いは右足を海の上、左足を地の上に置いて、^{3a} 獅子が吼えるように大声で叫んだ。

これは、海に対しても、地に対しても圧倒的な権威と主権を持っていることを示しています。復活されたイエスが、弟子たちに何と言われたか思い出してください。「マタイ 28:18 わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。」

これは、ダニエルがかつて見た幻に似ています。そしてそこに書かれている内容と、重なります。ダニエルは、終わりの日の大きな戦についての幻を見ました。ハルマゲドンの戦いに至る、大きな戦いです。その中で、ユダヤの民が苦難を受けることを知りました。しかし、御使いミカエルがやってきて、彼らを救います。そして、イスラエルは救われ、すでに死んだ者はよみがえり、ある者は永遠のいのちを得て、またある者は永遠の嫌悪に至ります。

そして、とても興味深いことを、御使いがダニエルに教えます。「12:4 ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと捜し回る。」このことについては、終わりの時まで秘めておきなさい、封じておきなさいと命じられています。そうなんです、今は、黙示録において、小さな巻物が開かれており、すでに秘められておらず、明らかにされているのです。

そして、ダニエルは、川の水の上に、亜麻布を来た人を見ました。その御使いに尋ねました。「12:6 この不思議なことは、いつになると終わるのですか。」と言っています。そして、次の答えがありました。「12:7 すると私は、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人が語るのを聞いた。彼はその右手と左手を天に向けて上げ、永遠に生きる方にかけて誓った。「それは、一時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する。」この宣言こそが、今、黙示録 10 章で現れている、力強い御使いが大声で叫ぶ内容そのものなのです。

「一時と二時と半時」この期間が、黙示録 11 章から出てきます。ある時は 1260 日、またある時は 42 カ月間です。当時の暦で、一日は 360 日の計算です。これは、ダニエル書 9 章 27 節に出てきた、第七十週目の最後の七年の後半の期間、三年半のことです。「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」ユダヤ人と聖なる都エルサレムについての契約です。一週とは七年間のこと。この契約を定めた半ば、つまり三年半の時に、彼は、再建されたエルサレムの神殿のいけにえをやめさせて、ダニエル 11 章には、自らを神として宣言し、神殿の中に入ります。

この時に、聖なる民、ユダヤ人が試みを受けます。そして、ダニエル 12 章 7 節に「聖なる民の力を打ち砕くことが終わる」とありますが、これが大患難の時の、ユダヤ人に対する神のご計画です。彼らは打ち砕かれます。それで、残りの民がメシアを願い求めるようになります。このことを宣言した御使いは、手を天に挙げて、永遠に生きる方を指して誓っています。似たような姿でここ黙示録 10 章の力強い御使いが永遠の方に対して誓っています(6 節)。そこで、11 章から 13 章までは、この一時と二時と半時の期間、最後の週の後半部分についての預言になっています。

そして、獅子が吼えるように叫んでいますね。これは、主が預言によってはっきりと、誰にでも聞こえる形で語っておられる姿であります。「アモス 3:8 獅子が吼える。だれが恐れなくていられよう。【神】である主が語られる。だれが預言しないでいられよう。」主は、5 章で「ユダの獅子」とも呼ばれていました。

^{3b} 彼が叫んだとき、七つの雷がそれぞれの声を発した。⁴ 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天からの声がこう言うのを聞いた。「七つの雷が語ったことは封じておけ。それを

書き記すな。」

ここから、私たちが神のご計画や啓示について、信仰の姿勢が試される場面に入ります。私たちが、神のなされていることに、どうも理解できないという、正直な思いがあるでしょう。自分の思いと、まるで違うからです。しかし主は、ご自身の思いは、天が地よりも高いように高いと言われ、あなたがたの思いとは違うということ、イザヤの預言でも語っておられました。じれったさがありながら、けれども、そのことばにある神の権威に服するという姿勢が試されます。

まず、「七つの雷」ですが、七は神を表わす完全数ですから、神からの雷ということです。詩篇 29 篇において、自然界の雷の音が主の栄光を表して、主がまことに王であることを宣言している詩歌になっています。主の威厳と力、そして主がすべての王であられること、そしてご自分の民には平安を与え、祝福を与えられること、これらを示しているのです。主がシナイ山に現れた時には、雷と稲妻がありました。

そしてヨハネがこの雷の声を書き記そうとしたら、天から声がしてそれを禁じられました。ヨハネはこれまで、見たこと、聞いたことを忠実に書き記し、証していましたが、ここで書き記すなと言われていました。これは、おそらく、主ご自身の再臨の栄光にある雷鳴であります。けれども、今はその栄光の中身を知るのではなく、神のご計画の中ではまだ隠されており、自分たちはこれから与えられる、すでに明らかにされている預言に目を留めるべきだということです。私たちが、ある映画やドラマの予告編を見せられて、その一場面を見て、ああだこうだと憶測を語りますね。人気のある番組だと、ユーチューブではそういった憶測の動画が並びます。けれども、もし今、種明かしをしたら、すべてが台無しになりますね。

主はご自分のご計画において、知恵と思慮を用いて、明かすものとまだ明かさぬものに分けておられます。「エペ 1:8-10 この恵みを、神はあらゆる知恵と思慮をもって私たちの上にあふれさせ、9 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。その奥義とは、キリストにあって神があらかじめお立てになったみむねにしたがい、10 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」神の知恵と思慮をもって、みこころの奥義があるのだということを私たちは知ります。その時に、私たちに負荷がかかるのです。それは、主がこれからご計画を完成されようとするので、どうしても、その結果を早速、知りたくなってしまいます。しかし、主は今、与えられているもの、示されているものに留まっていることを勧められます。

イエスが、復活の後に弟子たちに神の国のことを語られましたね。弟子たちは、そこで「使徒 1:6 主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」と尋ねました。するとイエス様は、「1:7 いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。

それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。」そう言われました。ここの部分が、ちょうど七つの雷に当たる部分です。神の国が到来し、イスラエルが再興するのは確かです。しかし、そこに至るまで、主は、聖霊の注ぎを受けて、弟子たちがご自身を証しすることを命じられ、こちらに、集中しなければならないのです。

2B 神の奥義の実現 5-7

そこで次の御使いの言葉が重要になります。主の再臨について、その威光と力を現す七つの雷は、書き記すのを許されませんでした。次の、預言者たちの言葉について、こちらに目を留めるべきであると指示を与えるのです。

⁵それから、海の上と地の上に立っているのを私が見たあの御使いは、右手を天に上げ、^{6a}天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを造って、世々限りなく生きておられる方にかけて誓った。

御使いは右手を天に上げました。ダニエルの見た御使いは両手を天に上げていますが、ここの御使いは力と権威を表す右手を天に上げています。そして、誓っていますが、これは、議論の余地のない、確実なものであることを保証する時に行うものです。ヘブル書6章16節には「確かに、人間は自分より大いなるものにかけて誓います。そして、誓いはすべての論争を終わらせる保証となります。」とあります。今、御使いが永遠に生きておられる創造主に誓っています。今から話すことは、確かに起こることなのです。

^{6b}「もはや時は残されておらず、⁷第七の御使いが吹こうとしているラツパの音が響くその日に、神の奥義は、神がご自分のしもべである預言者たちに告げたとおりに実現する。」

「もはや時は残されておらず」と言っています。巻物は開かれました。そして、第七の御使いがラツパを吹こうとしています。その日には、「神の奥義」が成就する、とあります。神の奥義とは何でしょうか。「以前は隠されていたが、明らかにされるもの」という意味です。

奥義という言葉は出て来ませんが、ペテロが奥義のことを分かり易く説明しています。「1ペテロ1:10-12 この救いについては、あなたがたに対する恵みを預言した預言者たちも、熱心に尋ね求め、細かく調べました。11 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証したときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。12 彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。」預言者たちには啓示があったのです、けれどもその意味を悟ることが出来ません。しかし今、聖霊

によって福音を伝えている人々によって明らかにされているのです。

そして再臨について、ダニエルには御使いが「封じられている」と言っていました。しかし、キリストにあって今は明らかにされています。それが、「神がご自分のしもべである預言者たちに告げた」とおりのことなのです。これが、ダニエルの預言を始め、多くの預言者が語っていた、終わりの日における大患難のことです。

ダニエル 9 章 27 節に、最後の週、第七十週の七年間が、荒らす忌まわしい者がユダヤ人たちと契約を結ぶ期間であることが示されています。そして、その半ばで彼がいけにえをやめさせます。それが、イエスが弟子たちにオリーブ山で語られていた大患難のことです。「マタ 24:15-22 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。17 屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。18 畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。19 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。20 あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われません。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。」

これはイエスが語られている真新しいことではなく、旧約時代の預言者たちが、終わりの日に、残りのイスラエル民が患難を経て、それで救われることを語っていて、その預言に沿って語られていることです。例えば、エレミヤはこう預言しました。「30:7 わざわいだ。実にその日は大いなる日、比べようもない日。それはヤコブには苦難の時。だが、彼はそこから救われる。」主が再臨される前に、まずこれらの不法が世界に起こるという預言が実現しなければいけないのです。

このことについて、ちょうど主ご自身の十字架の道に似ています。主が、ご自分が栄光を受けるには、苦しみを経なければいけない事を教えられました。その栄光はとてうれしいことですが、そこに至るまでは苦しみを経なければいけないのです。同じように、主が戻って来られる前夜には、ご自分の民が苦しみを経て、それで初めて救われるという計画なのです。

2A 甘く、苦いことば 8-11

⁸ それから、前に天から聞こえた声が、再び私に語りかけた。「行って、海の上と地の上に立っている御使いの手にある、開かれた巻物を受け取りなさい。」

4 節で、七つの雷について「書き記すな」と命じた同じ天からの声が、ヨハネに話しかけています。ここでは、受け取って、再び預言しなさいと命じられていきます。

⁹ 私はその御使いのところに行き、「私にその小さな巻物を下さい」と言った。すると彼は言った。「それを取って食べてしまいなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」¹⁰ そこで、私はその小さな巻物を御使いの手から受け取って食べた。口には蜜のように甘かったが、それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。

「それを取って食べてしまいなさい。」というのは、預言を受けて、それを語る時にエゼキエルも命じられたことです。「2:8-10,3:1-3 人の子よ。あなたは、わたしがあなたに語ることを聞け。逆逆の家のように、あなたは逆らってはならない。あなたの口を大きく開けて、わたしがあなたに与えるものを食べよ。」⁹ 私が見ると、なんと、私の方に手が伸ばされていて、その中に一つの巻物があった。¹⁰ その方はそれを私の前で広げた。それは表にも裏にも文字が書かれていた。そこに嘆きと、うめきと、悲痛が記されていた。^{3:1} その方は私に言われた。「人の子よ。あなたの前にあるものを食べよ。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に告げよ。」² 私が口を開けると、その方は私にその巻物を食べさせ、³ そして言われた。「人の子よ。わたしがあなたに与えるこの巻物を食べ、それで腹を満たせ。」私がそれを食べると、それは口の中で蜜のように甘かった。」

同じように、ヨハネはそれを取って食べました。そして口には甘かったのですが、腹に入ると苦かったのです。エゼキエルも同じようにして神から言葉が与えられ、苦々しい思いになっている場面が出て来ます。「エゼキエル 3:14 霊が私を持ち上げ、私を捕えたので、私は憤って、苦々しい思いで出て行った。しかし、主の御手が強く私の上にのしかかっていた。」なぜかというと、神の裁きの預言をしなければいけなかったからです。

¹¹ すると私はこう告げられた。「あなたはもう一度、多くの民族、国民、言語、王たちについて預言しなければならない。」

12-13 章、第七のラッパが吹き鳴らされると、さらにひどい災いが書かれています。これは全世界的な出来事として及びます。多くの民族、国民、言語、王たちに及びます。ヨハネは、これらを語るのはあまりにも苦々しいことですが、御国が来るまでに起こらなければいけない預言は、聖書の中にまだまだたくさんあります。

イエスが、十字架につけられるとき、「マタイ 26:54 しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか。」と言われたことを思い出してください。ところで、福音書は、時系列的に見ると非常に偏っています。生まれておよそ 30 歳になられるまでの頃は思っきり、飛んでいます。そしてその三年半ぐらいの公生涯については、初めの宣教については大雑把に書かれていて、最後の数ヶ月、そして最後の数週間、最後の数日間、そして十字架につけられる前の夜と、次の朝と夕方に至るまでの記述は、かなりの紙面を割いています。

なぜなら、そこで起こっている一つ一つの細かい出来事が、主の永遠の救いのご計画の中心部分、キリストの苦難を担っているからです。聖書は、その出来事について多くを預言しています。

再臨も同じです。主が再臨されるにあたって、その前に起こらなければいけないことは、再臨が近づけば近づくほどたくさんになっています。最後の第七十週の半ばについて、聖書はたくさんのごことを預言しています。第七のラツパが 11 章で吹き鳴らされるのですが、11 章で終わるのではなく 19 章の主の再臨まで続くのです。

神の御言葉には希望があります。それは口に甘いことです。主が全てを支配しておられること、そして主の到来によって正義と平和の国が確立すること。そこに神の至福が備わっていること。全ての悲しみが過ぎ去り、涙もなくなること。新しくされること。これらはすばらしい事です。そして主は必ずそれを行なう、時は遅れることはないとお励ましてくださいました。

しかし、それを語るにあたって、荒らす忌まわしい者が現れて、彼がキリストによって滅ぼされるということまで語らなければいけない。つまり、さらなる悲しみと涙と苦しみと、神の激しい裁きを語らなければいけないということです。そして、これを語るために、巻物をヨハネは食べました。私たちも、神のことばをそのまま自分の中に入れて、受け入れます。それがただ甘いだけでなく、苦いものもあるのです。そして私たちはダニエルと同じように、ヨハネと同じように、神に愛された者たちです。だからこそ、その愛の中で、苦々しいことばを引き受ける大役を担っています。

ある人は言いました。聖書預言を学ぶことは甘い作業だと。聖書預言セミナーに集うことも甘い作業です。多くの方がエキサイトします。携拳は近いのだと。主の再臨は近いのだと、しかし、それを実際のこととして受け止とめることは、苦いということです。なぜなら、御国が到来するまで、教会の使命として福音を語り、またキリストの体を建て上げていくのです。パウロは困難な時代になると、教会に対して何度となく語りました。つまずきが多くなり、愛が冷えます。自分自身への愛、高ぶりが多くなります。預言を傍観しているのと、預言の中に生きるのでは、まるで違うのです。預言をただ目にするのと、それを食べるのでは大きく違うのです。

しかし、最後にパウロがテモテに命じたことを分かち合います。「Ⅱテモ 4:1-2 神の御前で、また、生きている人と死んだ人をさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思いながら、私は厳かに命じます。2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」そして、パウロは、主が来られる時には、一人一人が終わりに義の冠を受けると励ましています。主は、ご自身を花婿と呼び、私たちを花嫁にしました。私たちは、お会いできる時を忍耐して待ち望みます。「主よ、来てください。マラナタ。」と告白して、愛する方を待ち望むのです。